

No. 1211

ある終業式

— 福岡・しいのみ学園 —

「ぼくらはしいのみ まあるい しいのみ
おいけにおちて およごうよ
おててに おちてにげようよ
おまどに おちてたたこうよ たたこうよ」

3月24日、個人の力で運営されていた、肢体不自由養護施設、しいのみ学園が一担終止符を打たれ、子供たちにとっては最後の終業式が行われた。

園長昇地三郎さんの言葉「23年間は長い年月でありますでしたがたった昨日のようにも思われます。いろいろ違った所にいっても、しいのみ学園で学んだ（明るい心、やさしい心、強い心）、この3つの心をもって1日1日を頑張ってください」。

昭和29年創立以来園長を中心とした独自の障害児教育でひたすら子供たちのしあわせのために歩み続けてきたしいのみ学園、23年間の長かった歴史は閉じられ、子供たちは今日を限りに学園を去って行く。

しいのみ学園は福岡市の南、井尻にしいの木に囲れてあった。学園は楽しかった。どんな重度の子供でも松葉杖も車椅子も使わせなかった。そして子供たちを世間の学齢基準で切ることをせずいつまでも皆んないっしょだった。独自の心理療法を取り入れ「叱からざる教育」を柱にとにかく暗くなりがちな子供たちに明るい笑顔を絶やさせなかった。たった1ミリの歩みを大切に、生涯教育を園長と同じ子を持つ親と親だけに通ずる信頼に支えられて守り通してきた、いままでの型の学園が消えることになったのは積み重なる赤字に加えて昭和54年度から全学齢障害児の義務教育化によって存立意義が薄くなってしまったからだ。

思えば昭和29年、昇地三郎、露子夫妻が、当時18才だった長男有道さんと7才だった二男、照彦さんが小児マヒにおかされ、悲しみに歯をくいしばりながら私財を投げ打ってこの愛の学園を建てた。有道さんは両手足の不自由な身でありながら、「自分と同じ苦しみをたどる子どもたちの小使さんになるんだ」といって学園の鐘を鳴らす役目をしてきた。その鐘の音に象徴されるような、身体の不自由にもめげず、明るく生きようとする学園の子どもたちの姿が翌年映画化され、全国津々浦に深い感動を呼んだ。有道さんは昨年他界した。創立当時から学園にいた平島くんは「やっぱり別れるのつらいもん。やっぱりさびしい。でもばらばらになってもひとりひとりが文通のやりとりすれば……」。

子どもたちの代表、ヤス子ちゃんからお礼の花束が園長先生に贈られた。古びた木造校舎でひっそりと障害児教育を続けてきたしいのみ学園。この子どもたちを最後に個人の善意にたよる福祉の時代は終わったのだろうか。